

*

セレスト・アルドレの『ムッシュー・フルースト』を読んだ。

セレストは、フルースト最晩年の8年間を彼とゆかりがあった、家政婦(兼秘書)である。今日、歳八十を優に超えた彼女が、なおも鮮やかな往時の記憶をたどりながら、証言してくれたのは、あるひとつの、ほとんど信じ難いほどに純粋で強靱な精神が、たしかに生きて実在していた、という、まぎれもない事実の記録である。そこに描きだされてあるフルーストの日常は、あまりに苛酷なものであるのだ。あるいは、ひとは、それを単なる誇張の産物だと見做そうとするかもしれない。しかし、どのような理由によっても、ある不可抗的な電撃にむかえられた人間は、その瞬間から、いかようにでも、そのような無償の喜びへと、はてしなく叫びよせられてしまうことが、できるのだ。そのことを、わたしは、これまでわたしが実際見聞きしたゆかりな戦場からさえ、断言することができる。し、そのような事実を信じることができないう首は、なんと不都合せなのだろう。

フルーストは、生れ育ちのよい、利発な子だった。父は、高名な衛生医学の教授で、母の実家は、ユダヤ系の資産家であった。彼は、ほとんど勉強などしなかったのに、11つでも抜群の成績だった。襟に襟の花をさし、着かざって、多くのサロンをめぐり歩いた。フルーストは、頭のよい男だった、むしろ、よすぎた、と言うべきかもしれない。伊達男ぶりながら、彼は一切入事の奥の奥、底の底、裏の裏まで読み抜いていってしまう。そして、あるとき、世

Hashizume Daisaburo 5-9-11 Zaimokuza, Kamakura, 248 JAPAN
Phone 0467-22-1030 横浜 51782 CN 66 ¥25.-/10 pages

界が逆転する。すべては終わってしまったかのようだ、世界も、またこれも、作品のためにしかのこされていない。一切を書きしるさねばならぬ、手遅れにならないうちに。(こいぞ、おさましい頭脳とよびたければ、よびがよい。) そこで、競争がはじまる、時間との？ 寿命との？ 衰えとの？ あまっさえ、彼は、病弱の喘息もちだ。アパートマンの、ユルク張りの自室に閉ぢこもり、ほとんど何も摂らな、ほとんど眠らな、ベッドのなかで、書きつづける、唯一つの作品を。外出も、面会も、その他の外界との接触もぎりぎり最小限にまで切りつめられてゆく、作品のために必要とされる限りに。間にあうのだろうか？ 作品は完成するのだろうか？ おそらく、かたよきの気の休まる間もなく、くる年も、くる年も、延々とそうした日々が繰り返られていく、彼が息をひきとるその日まで。

かつてフルーストが日本で「流行った」のは、それが、単なる少女趣味の手軽な読みものと、うけとられたからであるようだ。しかし、もちろん、それは、ほんのみかけにしかあてない。『失われた時を求めて』という作品の成立を考へてみると、それが、誰よりも剛直で、緻細で、冷徹で、情熱的で、緻密で、超人的な頭脳と魂の産物でしかありえないことが、わかるだろう。そうした点では、ムギール、カフカ、ドストエーフスキ、ジョイス、セリーヌ、バケットらの場合と、同列である(あるいは、ことにすると、それらを上廻らなるとはいえない)のに、まちがいない。セレストの証言から、わたしは、フルーストの精神の作動のなかに、ひとかけらの病的な徴候もみとめられなことを、知った、それは、予想はしていたものの、それ以上の収穫であつたと言える。

作家たちが書客行為に賭ける度合がとりわけはなほだしいのは、もともと当然だとしても、それを社会科学者たちとひき較べてみるなら、残念ながら、社会科学者の側に丈々に遜色をみとめないうけにはいかなない。どうにかその道において抵抗できなくもないのは、マルクス(とラズナー)位では、ないだろうか？ もちろん、散文の方が、ほるかに表現の言説であるのに対して、(社会)理論は、

仮設の言説であるのだから、その言説の効力か、事態が明証である範囲に局限されてしまうのは、仕方のないことかもしれない。言説は、妥当なものでなければならず、それ自身で充足するというよりは、その外に基準をもったままであることを、余儀なくされるのであるから。個々の言説は、その介だけ、肉声の輝きから遠ざけられてしまうことになる。これは、口惜しいかぎりだ。しかし、そのかわりに、仮設の言説は、論理によって秩序づけられ、方法的に組織された、ひとつの遷延体全体として、知の構成物として、あらわることができるだろう。あるいは、考えようだが、この仕方にこそ、事実に世界に拮抗するべくあることばの性能が、いかに発揮されている、と言えるのかもしれない。それゆえ、理論の営みが、ぎゃくに、どれほどの肉声を鎮めることができているのか、わたしはさしあたり、そのことを、もっぱら気にかけている。たとえば、フェーストは、そのための潤滑剤のように、役立ってくれるはずである。

Céleste Albaret 1973 Monsieur Proust, Robert Laffont. 三輪秀彦訳『ムッシュ・フェースト』, 1977, 早川書房。

前頁『月報』を出して以来、つぎのものを書いた。

「〈言語〉研究集田への提言」(1978-4-7) (18枚)

「論評: 高木英至「協働過程の研究—社会学基礎理論の観点から」(1977)」(1978-4-13) (40枚)

「性別のありか」『「女性の社会問題」研究会・報告』2所収(近刊), (1978-5-2) (50枚)

「研究者運動の課題と戦略」(1978-5-15) (140枚)

そのほか、つぎのビブリオを作った。

「廣松渉音作集(抄)」(74点)

「'78 小室かみ・テキスト」(77点)

というわけで、肝腎の「記号空間論」の新らしい作業には、この間、

ほとんど手をつけられない。今後はなるべく、余計な仕事をしないですむよう、工夫しよう。

「論理の本態について」は、かなり先の方まで準備してあるが、手前には工事牛の箇所があるため、今号では、后人のゆしだけ掲載する。また、最近ようやく発行された『ソノオロゴス』2号に、「記号空間論」の基本視座」(40枚)がのせられてあるので、どうか御批判いただきたい。6月23日に言語研究会で発表するため、「経済の記号論(1)」を、いよいよまとめにかかっている。

ちょうど10年前のいまごろ、わたしは芝居にあけくれていた。(5月の1ヶ月間に、15回の舞台があった!) それは「劇団駒場」というのだが、永らく休止状態にあったこのクルーズが、この6月から、6年ぶりに活動を再開する。わたしは、とうに夜盲は廃めてしまったし、ほんのお手伝い程度のことしかしないが、公演(あるいは稽古)を観たいという方がいらっしゃれば、よろこんで案内させていただけよう。(芝居といっても、肩つうの「お芝居」ではないので、実際観ない方には、ちょっと説明しづらい。) わたしは、自分で買った切符を何枚ももっているのだから、本当に楽しんでいただけるとしたら、進呈しなくてもいいと思う。

ホモ・ヌ・777777 ACT & ACT 劇 団	PLANET PLAY プロセニウムアーチシリーズ No.1
	悲劇 天皇《祐 仁》
三百年劇場 944・5451	'78 6月18(日)→22(木) P.M. 6:30 IN
地下鉄 有楽町線 千代田線	原作・構成・演出 芥正彦 前予 2500 当 3000
白山通り 千代田線 白山 春日 目黒	制作 芥正彦・アキコ 373・4753 (電話予約)
水道橋 中野線	出演 芥正彦, 中島葵, 三原血太郎(演劇集団「日本」), 花房徹(自宅劇場), 安土修三, 柳部薫, 長谷川和彦, 田端敏生(「俳優」), 和泉聖治 他
神保町 大手町	

論理の本態について (4)

(後編)

Descartes が数学に注目したのは、もともと、彼の哲学才論上の問題意識からであった。彼は、確実な知にかかわる仕方として、幾何学、代数学、論理学、の3つに着眼する。まあ、幾何学は、まったく真であることが自明であるような少数の前提から出発し、それらの組立てによって、しだいにいっそう複雑な命題へすすんでいく点で、いかにも彼の気に入った。しかし、証明に要する技術がこみもりすぎている、想像力をいちがうしく疲弊させてしまう点は、あまりにも大きな欠点である。一方、代数学はといへば、操作が、単純な手順の機械的な積みかさねとなっている点で、大いに彼気に入った。しかし、既存の代数学は、残念ながら、ただただ規則や記号の類いに縛られた、ややこしくも混みあった技法のかたまりになってしまっていて、きりめて見通しが悪く、思惟をはばたかせるよりは、悩ませることの方が多い。また、第三に、論理学はといへば、すでにわかっている既知の事柄を整理するのには、有用であつたかもしれないが、知を獲得する発見的な方法に用いるには、はなはだ不向きなものにすぎないように、見えたのである。そこで、知をふたたび根柢から秩序づけるために、Descartes は、論理学の確実性、代数学の演繹性、幾何学の体系性をひとつに兼ねそなえたような、彼独自の新しい方法——解析的方法——を、構想したのである。解析幾何学は、その最初の具体的な成果であった。

解析的方法によって、Descartes がいかなる知の体系を構成していったのか、たついては、のちにまたたびふれるとして、ここでは、解析幾何学が、数学のどのような転回点にあたっているのかを、確認しよう。

Descartes の解析幾何学は、たとえば2次曲線の取扱いを、非常に容易にした。それはそれで、たしかに大きな成果である。しかし、はなにより重要なことは、解析幾何学が、図形を実数体のなかでの方

程式に、あるいは、幾何学上の問題を代数学上の問題に、さっくりとのまほおきかえてしまう、変換装置になっていること、である。数と図形のあいだに対応がつくことは、ずっと昔から知られていた。ガリレオ人たちの場合は、Descartes の場合とは逆向きに、すべてを幾何学におきかえようとし、たとえば、方程式を作図によって解いたりしていったのである。しかし、代数学が発達するにつれ、その操作性の高さは、初等幾何学とは較べものにならなくなる。それゆえに、解析幾何学の発明は、数学の進歩のあしどりを、飛躍的に高めることになった。なぜなら、幾何学と代数学とが、まったく対応し、相互に変換可能である以上は、

- ① 代数学（ならびに、全数学）もまた、ユークリッド幾何学のような、公理的な体系性を、そなえる（はずである）こと、
- ② 幾何学上の命題はすべて、代数学上の命題に翻訳できること、しなげがって、
- ③ 幾何学上の難問題もまた、のこらず、代数学上の問題へと、移しかえられること。

もまた、判明であるから、である。③は、数学が代数学を超越する契機を、なすものであった。実際、解析幾何学が発明されたなら、微分法・積分法を含む解析学、さらには、抽象代数学への数学の発展は、まっしぐらに一直線の過程だといっても、言いすぎではないだろう。

* Newton の仕事を理解するには、Kepler, Descartes と並び Newton のもう1人の先行者 Galilei の仕事を、理解しなければならぬ。

Galileo Galilei は、数多くの仕事によって知られているが、ここでわれわれがさしあたり注目すべきは、もちろん、落体の運動の研究をはじめとする、彼の物理学上の業績について、である。今日われわれが知るような物理学上の法則の多くを、Galilei はみちびきだすことができたが、そのために、彼は、中世以来の教条たる、Aristo-

totelēs-Schola の自然哲学を、覆さなければならなかった。Aristoteleēs は、現象を観察した結果、導いた力学は、次のようなものであった——すべての物体は、静止するとき安定なのであり、運動は外力がはたらくときのみ、生じる、すなわち、運動の速度は、そこに作用する外力に比例し、抵抗に反比例する。また、落体がしだいに速度を速めるのは、奔流する空気によって、後ろから押されるためである——。Aristoteleēs の説明が、経験の抽象にもとづく妥当な理論になっていることは、まちがいない。しかし、Galilei は、抽象の仕方を工夫し、より徹底させることによって、はるかに意味のある結果とする別種の理論を構成できることに、思いついたたのである。

Galilei の方法の最大の特徴は、事象を数量的にとらえ、記述するところにあった。すなわち、彼は、力学現象のなかから、時間、重量、距離、速度、加速度、……といった変数を抽出し、それら変数相互間の数学的関係として(だけ)、現象を再構成する、という、自然の定量的なモデルを構築しようとしたのである。また彼は、いわゆる「慣性の法則」を、洞察した。摩擦や抵抗にもとづく運動の減衰を一切捨象するならば、運動している物体は、(外力が加わらない限り)等速度で運動する(等速で一直線上をどこまでもすすみつづける)。すなわち、力は、決して運動の原因ではない、運動の状態を変化させるものである。力は、加速度、および物体の質量に比例する。——Galilei は、このような基本原理から、濃密に、多くの妥当な物体の運動法則が導出できることを示し、(地表付近における)物体の運動を、ほぼ完全に説明できるだけの、数学的な理論体系を、つくりあげることができた。

Galilei は、また、自身で望遠鏡を發明して惑星を観測した結果、その形状が、地球と似ている点と、見だしていた。Aristoteleēs の力学の枠組みが妥当でないとするならば、これら天体の運動も、地球上の物体の運動と同一の原理によって説明できるのではないだろうか。という予想が、当然にも生じてくる。Newton は、その予想

を、現実のものとした。

Newton 自身は、敬虔で控え目な男であったが、彼の力学理論の成功は、革命的な、あらゆる種類の測り知れぬ影響を及ぼすことになった。Newton 力学は、高等学校でも教えるので、誰でも知っているはずであるが、ゆいゆいからここまではっきりさせたのは、彼の仕事だ、なぜ革命的な仕事としてあってしまうのか、という、その理由である。

Newton は、天体の運動を仔細に検討した結果、ふたつの天体のあいだにはたらく力は、両者の質量の積に比例し、両者をへだてる距離の 2 重に反比例するのではないかと考えた。それが、重力の法則であって、次のような公式によって表現されることになる:

$$F = k \frac{mM}{r^2}$$

この法則は、たとえば、月の、地球をめぐる軌道上の運動を、地球が月に及ぼす重力の作用によって、説明することができる。また、この法則は、Galilei の、落体に関する一連の研究の結果を、基礎づけるものである。しかも、Newton は、上の公式から、Kepler の第 3 法則(“惑星の公転周期の 2 重は、惑星の太陽からの平均距離の 3 重に、比例する。”)を、演繹的操作によって導くことができることを、示すことができた!

Newton 力学の成果を端的に要約するには、つぎのように言えばよいだろう——それは、あらゆる自然諸対象に関する、公理的に構成された理論体系である。「あらゆる」対象とは、それが、地上の物体ばかりに限らぬ、天体をも含む、(およそ質料をもつと抽象されるかぎりでの)宇宙のすべての物体に関して、説明力をもつことを要求する理論であることを、いみする。Newton の理論体系は、Kepler の天体理論と Galilei の運動理論とを包括することによって、絶対的位置を占めることになった。また、それが「公理論」

的に構成されてある。とは、理論のいくつ命題のおべてが、ごく少数の公理的な基本法則から、演繹的に導出されることをいう。Newton が、彼の力学理論の基本法則として採用したのは、

(i) 運動する物体は、(外力を加えられない限り) 等速直線運動を継続する。(Newton の第1法則。これは、Galilei の慣性の法則と同一の内容である。)

(ii) $f = m a$ (Newton の第2法則)

(iii) $f = -f'$ (Newton の第3法則)

の3つであった。(このうち、(i) は、(ii) で $f=0$ としたときと一致する、と解釈できるのだから、(i) は含めなくてもよい。) しかもその上に、Newton の偉大な点は、彼の理論体系の諸々の命題(公式)のあいだに論理的に關係づける数学的な操作——微分・積分法——をも、自らの手によって捨ててしまったことである。

Newton 力学がはなはだ満足すべき成功をおさめた結果、自然現象が、数学をその本質的部分に組みこんだ科学理論によって、解明される、可能な限り、世界は合理的である、という信念は、まことにやがてないものとなっていく。これが、いかに甚大な思想的意味をもったかは、いくら強調してもしすぎることはない。

Newton の体系は、Eukleidēs の幾何学体系以来、久方ぶりに人類が手にすることのできた、ふたつ目の完全理論である。しかも、この Newton の体系の場合に重要なことは、それが、純粋数学とは異なっていて、経験的な命題からなりたつ科学理論としてある、ということである。このように、経験的な領域において、単なる経験一般化をはるかに踏みこえたような、形式的な理論が成功したことは、率直な驚きによってむかえられた。その上、Newton の力学モデルが、一見それと関わりなげかにみえる領域にも、適用可能なものであることが、次第にあきらかになるにつれ、経験的な諸領域に関する知識を構成するのに、基本的には、もはや科学以外の方法は無用無益であることが、ますますはっきりしてくる。このようにして、大幅

な識知論上の地に리가、生じていく。

しかしながら、Newton の体系にしても、実のところ、方法論的に問題となる部分がある、はいわけではない。Newton が前提している絶対時間・絶対空間や物理的諸範疇(慣性質量、重力質量、……)のあいだの相互關係をつきつめていくと、そこに論理的下整合が隠れていることが、判明してくる。だが、こうした下整合が問題とされるようになるには、おっとのちの、Einstein の相対論を、またなければならぬ。われわれも、この物理学のつぎの転回点に目を配るときに、Newton の体系の問題点を、また及いてみることにしようと思う。

Newton の理論の出現は、人間の知を考へる思想家たちに、大きな波紋をなげかけた。その最たるものは、Kant の場合であると言えようが、われわれは、Newton からいったんすこしさかのぼって、まず Descartes の方法論、またそれにうづく思想家たちの仕事に、論理を位置づけるさまざまの仕方を、あるいは、知の公理論的構成の諸類型を、順次見てとっていくとしよう。

TABLE 6

Hobbs, Thomas	1588-1679
Descartes, René	1596-1650
Spinoza, Baruch de	1632-1677
Locke, John	1632-1704
Newton, Isaac	1643-1727
Leibnitz, Gottfried W.	1646-1716
Berkeley, George	1685-1753
Hume, David	1711-1776
Kant, Immanuel	1724-1804
Hegel, Georg W.F.	1770-1831
Fourier, Charles	1772-1837
Feuerbach, Ludwig	1804-1872
Marx, Karl	1818-1883
Engels, Friedrich	1820-1895

(以下次号)